第58回「おかねの作文」コンクール

秀作

兄の財布を見た日

東京都・中央区立晴海中学校　3年　鄭　星来

私は、おこづかいをもらうとすぐに使ってしまうタイプだ。コンビニでお菓子を買ったり、かわいい文房具を見つけると、つい手が伸びてしまう。あとで「使いすぎた」と思うこともあるけれど、そのときの気分にまかせて買ってしまうことが多い。

そんな私とは正反対なのが、兄だ。兄は無駄な買い物をしない。必要なものでも、本当に欲しいと思ったときにしか買わない。服も長く着ているし、ゲームやスマホの課金にもほとんど使わない。何にお金を使っているのか、正直よくわからなかった。

ある日、兄が玄関でカバンから何かを出そうとしたとき、うっかり財布を床に落とした。中に入っていたレシートに、「ハンカチ」や「洋服」「小物」といった文字が見えた。私は少し驚いた。兄は、祖父母や叔母の誕生日に、毎年きちんとプレゼントを贈っている。それを自分のおこづかいで、静かに用意していたことに改めて気づかされた。

以前、叔母の誕生日に、兄が小さな紙袋を持って訪ねていったのを思い出した。「ちょっとこれ、気に入るかわかんないけど」と言いながら渡していたその様子は、少し照れくさそうで、でもどこか誇らしげにも見えた。兄は自分のためではなく、家族のことを思いながら、ちゃんと考えて使っていた。

私はといえば、欲しいものがあればすぐにお金を使ってしまうし、何に使ったか覚えていないこともある。兄のように「誰かのため」や「意味のある使い方」ができたらいいなと思った。

お金そのものには心がない。でも、どう使うかで、その人の考え方や性格が表れる。兄のレシートを見たとき、私はそれを強く感じた。

たとえば、同じ100円でも私は喉が渇いてジュースを買うかもしれない。お金の使い方はその人が何を大切にしているのかを映す鏡のようなものだと思う。私はそのとき初めて、「お金の使い方には責任がある」ということを意識した。

©J-FLEC2025

これまでは「欲しいから使う」「楽しそうだから買う」としか考えてこなかったけれど、兄のように「誰かのために、何のために使うのか」を考えることは、自分自身を見つめることでもあると気づいた。その日から私は、少しだけお金の使い方を気をつけるようになった。文房具を買いそうになったとき、「本当に今必要かな？」と一度立ち止まって考えてみた。何かを買う前に、「これを誰かと一緒に使ったらもっと楽しいかな」と考えることもある。

お金を使うかは、その人の未来の形にもつながっている気がする。兄が静かに積み重ねている行動や気づかいは、きっとこれからの兄自身を作っていく。私も、自分の選ぶお金の使い方で少しずつ変わっていけたらいいなと思う。

兄の財布は、緑色のシンプルな長財布。とても目立たない地味な財布だけど、その中には、兄の優しさと家族への思いがたくさん詰まっていた。

©J-FLEC2025